

「新たな高齢者の健康特性に 配慮した生活指標の開発」

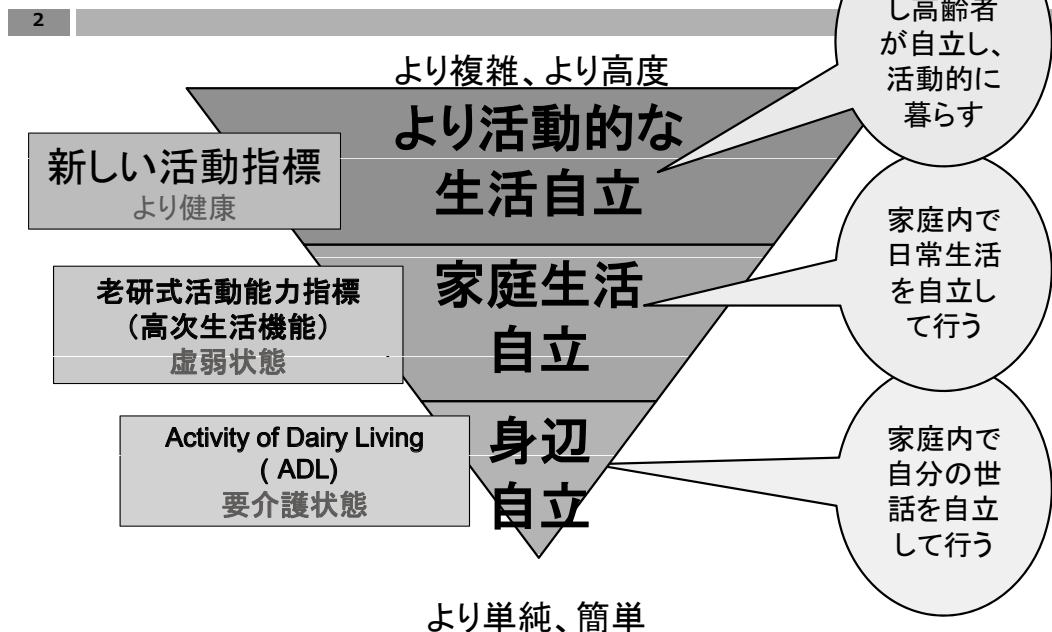
コミュニティで創る新しい高齢社会の デザイン (第2回領域シンポジウム)

「新たな高齢者の健康特性に配慮した 生活機能指標の開発」

鈴木隆雄 国立長寿医療研究センター
平成25年2月27日

RISTEX 社会技術研究開発センター
Research Institute of Science and Technology for Society

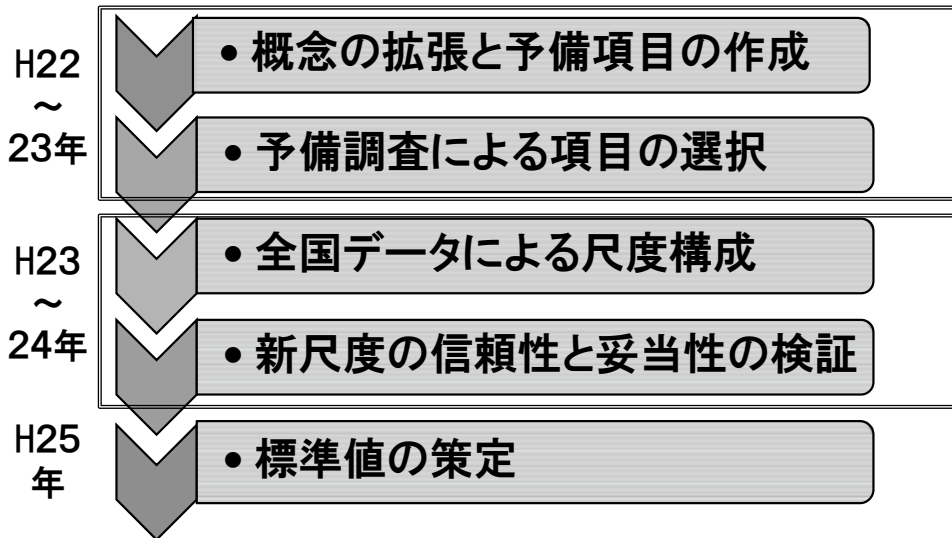
新しい活動能力についての考え方



東京都老人総合研究所副所長を経て、現在 国立長寿医療研究センター研究所長。専門は老年学、老年医学、疫学。特に高齢者の生活機能の維持向上に関連する要因を特定するための長期縦断研究に携っている。老年症候群や転倒・骨折の予防対策および介護予防にも力を入れている。



開発のプロセス



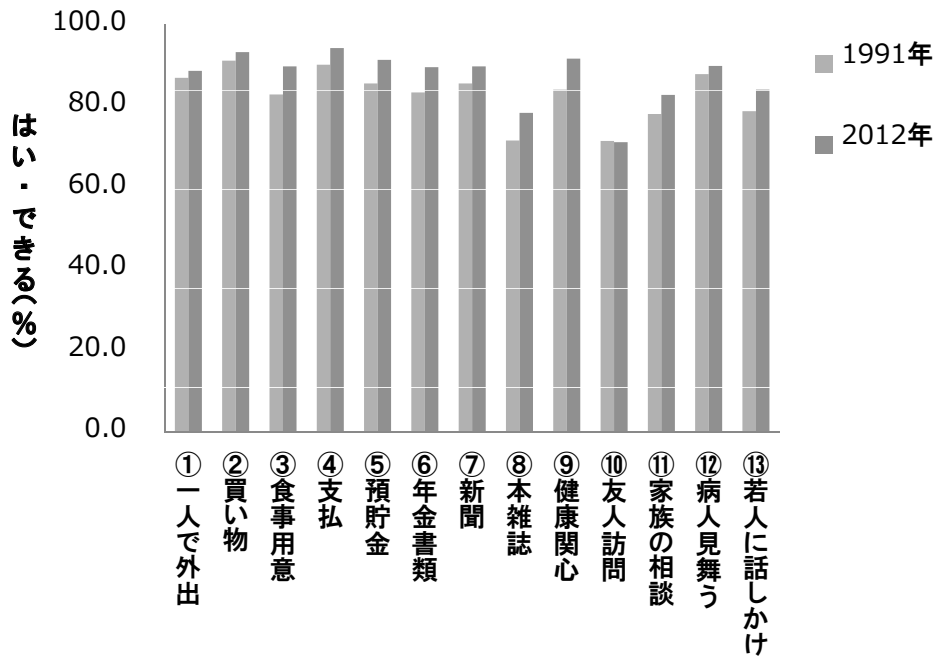
H24年全国調査の概要

□【対象】

- 2012年に全国の65-84歳の方，2000名を対象して配票留め置き調査を実施した。参加者は1333名(男性631名，女性702名 参加率66.6%)

	2012年 (N=1333)
対象地域	全国調査
対象年齢	65歳以上
抽出法	層化二段階抽出法
回収率	66.6%
回収法	配票留め置き
老研式総得点	11.3±2.7

老研式活動能力指標の分布



5

結果のまとめ

6

老研式得点は…

- 性差、年齢、地域差等があるものの、
- 開発当時に比べ明らかに現代高齢者でより高い得点
(13点満点の割合40%→50%に増加)

☞ 高齢者自身が元気に？ 栄養、体力、疾病等

☞ 高齢者を取り巻く環境が変化？
家電製品、ICT、ATM、移動手段、情報、流通

新指標開発の必要性

最終的な指標を構成する尺度項目の要件

- 通過率が適切なこと(20%以上、81%未満)
 - 老研式よりもよりレベルの高い活動能力を検討するため
- 地域やライフスタイルの影響をできるだけ排除
 - 性差： ϕ 係数が0.3以上 →1項目
 - 地域差： ϕ 係数が0.3以上 →0項目
- 基準となる老研式活動能力指標合計得点との関連
 - ポリシリアル相関:0.5以下 →4項目
 - ピアソンの相関係数:絶対値で0.3以下 →5項目
- 項目の精度:6)IRT項目情報量曲線:おおよそ0.2以下 →10項目

研究計画遂行のための予定

- 全国標準値を策定するための調査(H25年8月まで)
 - 平成25年4月ごろ実施の予定
 - 新活動能力指標と老研式を実施する。
- 最終尺度の信頼性、妥当性の検討(H25年8月まで)
 - 平成24年度の全国調査データを用いて
 - 構成された尺度と、体力、社会的ネットワーク、社会参加、well-being、プロダクティビティへの志向性、ICTの利用状況との関連から尺度の妥当性を検討する。
- 新活動能力指標のマニュアル作成(PJ終了までに)
 - 新尺度の、男女別、前期・後期別、全国標準値と分布
 - 新尺度と老研式の対応および統合スコアリング